

まえがき—愛と喜びの歌、寂厳の詩—

本書は、倉敷市連島の宝嶋寺の、江戸時代中期の住職寂厳和上(以下「寂厳」)の漢詩集『松石餘稿』詩篇の訳注である。寂厳は書道家としても著名であり、その書跡の現物の影印を付した。

詩は全て、一〇五首。杜甫が千五百首弱、白居易が三千首弱を伝えるのに比べれば、極めて少ないが、柳宗元は一五〇弱しか伝えていない。日本の同じく岡山の江戸末期の文人、浦上玉堂の『玉堂琴士集』は前後編合わせて一三九首であり大差ない。

説法や悉曇(梵語学)の講説、經典の書写、寺と檀家のための用務等、修行者としても住職としても、かなり多忙だった。だが、寂厳は詩に対して深い思いを持っている。

「仲秋」〇〇八に「林上月華臨み、……吟ずるに「一事の礙げなし(林の上に仲秋の名月が美しく輝いている……吟詠のさまたげとなるものは何一つない)」というように、月や山水の美に出逢えば、自ずと詩心が湧き起るし、日常の何気ない感懐を詠う詩も多いから、実際にはこれに数倍する詩を作っていたろう。「松石餘稿」は、自らの人生の歩みを確かめ、後世に伝えるものとして、数多くの詩から厳選した詩集だと思ふ。

哲定師に拠れば、おそらく自分の文字をそのまま刊行する意図で、楷書で丁寧に書いた。ただし、後、ほとんど、どの詩についても、書きこみを行い、よりよい作品を目指して、死の直前まで倦むことがない。

配列の基準は、わかい時、円福寺雑詠を中心とする円福寺住職時代のもの、真言宗八祖の面の賛である「讀寂津画八祖影」を中心とする宝嶋寺住職時代のもの、そして、晩年の作という分け方だと見受けられる。正確に制作年順に並べるのではなく、大きく時代別に分けた上で、その中で、花木を詠じたもの、送別・留別の作などを、ゆるやかにまとめたのだと思ふ。

詩型の面から見れば、七言絶句(略称「七絶」)が五四首で、半数。次いで、五言絶句が一五首、五言律詩が二二首、七言律詩が一一首、四言が九首、五言古詩が最も少なく四首である。七絶が多数を占めるのは、中国で宋代、民間でも詩作が盛んになるが、最も作りやすいのは七絶だからであり、この傾向は日本の知識人の詩作においても同様だったろう。玉堂も、一三九首中八六首が七絶である。(詩体については、「詩体解説」を参照されたい)

内容を見ると、何よりも、真言密教の修行者としての自分の歩みを書きとめようとしたものであることがわかる。例えば「大坂にて神龍と留別す」〇〇九に「洛東到る処何の風月ぞ、観誦茲れより常有らんと謀る(京都にはどんな心を迷わせる美景や風流が待っているか知れないが、これからは經典をしっかり読みそらんじ、求道の道を進んで行く覚悟である)」というの、三十四歳、京都に留学し修行する決意を詠じている。この詩をはじめとして、半数近い詩に、修行への思いを述べ、吐露している。

全詩を何度も読んで気づいたのだが、この詩集には悲哀を詠う詩がごく僅かしかない。

白居易が、「古の詩人たちが詠んだ詩の生まれるのを見るとき、ほとんどが讒言されての放逐、兵役や旅行、飢寒と病氣や老い、生き別れや様々な別離、こうして苦しみや悲しみの情が内に起こってそれを、外に出して来たものである。だから憂い憤り悲しみ痛む作が十のうち八九を占める」(序洛詩)といったように、中国の詩の大部分は悲哀の歌だ。宋以後は日常を詠うことが多くなり、日ごろの楽しみを詠む詩も増えるが、悲哀を詠じた詩はやはり多数詠われ続ける。

寂厳の詩は、ほとんどが喜び・楽しみを詠ったものである。悲哀を詠じたのは、晩年の作、弟子の死に慟哭したもの(〇八七、二〇二)や、自らの死期への感懐を詠じたもの(二〇三)に限られる。

そして、寂厳の詩は、何を対象にし、何を主題にしようが、愛に満ちている。師への敬慕・同年輩の和尚たちへの敬愛・弟子への愛、住職としての民への思い、雪月花・雪・月・松・菊・梅・竹等々への愛、生物・鳥・虫他への愛。寂厳の詩は、愛と喜びに溢れている。開巻冒頭の一首がそうなのだ。

「寒梅」〇〇一にいう。「向南の第一枝、雪を帯びて春姿を発く。君子なるかの子、人の知らざるを愁へず(南に向かう梅の第一の小枝、雪を帯びて春の魁としての花が開いた。まことに君子であるよこの君は。花が開いたことを知る人もいないのを気にしない)。寒さをしのいで、独り健気に開く梅を愛で讃える詩である。初めのこの一首で、寂厳を可愛いとさえ思う。寂厳との距離は一気に縮まってしまふ。

「臘月小園の梅に題す」〇一八に「天真独り楽しみて吟魂を育ふ(私は自分の本性のままに独り楽しみながら、詩を作る心をやしなっている)」というの、寂厳の詩のほとんどの底流にあるものだろう。

詩集の最後が、夢に見た富士山を詠う詩であるのも、寂厳の真髓「楽」を象徴するものではないだろうか。

この「楽」の精神、愛と喜びの根底にあるのは、真言密教の伝法者、修行者としての志であり、覚悟だろう。上に述べたようにそれがあらわに詠われる場合もある。しかし日常の感懐をふと詠じる詩にも、修行者としての寂厳の思いは自ずと反映している。それは何よりも、大乘密教が生きているエネルギーを大切に、そこに悟りの要諦を見る、その精神の賜物だろう。

それが寂厳自身の遊びを好む性質と結びついて、ユーモアとエスプリに満ちた詩が作られる。例えば、「浪速に円珠菴を訪ひ遇はず、戯れに題して去る」〇一四では「日出でて三竿、駒鬮るに似たり、門を出づれば又た山を崩すが若し(日はもう高く昇っているのに、まるで板でも削っているような感じが迎えてくれた。これではとても会えないと門を出たが、それでもまだ山を崩すようなものすごい音が追って来る)」というの、大阪で円珠庵の住職を訪ねた時、住職は高いびきで送迎してくれたと詠ったもの。隠者や友人を訪ねて会えなかったことを詠う詩は、中国の詩の一つの系譜だが、こんなユーモアに満ちた詩は、まず他にないのではないか。

「林泉翁が佳章及び盛饌、併せて以て祝と為す、卒かに和して謝を伸ぶ」○二三は、ご馳走をいただいた感謝を詩で述べたものだが、「論語」の教えを、実に機智を利かせて、楽しく詠じている（その機智については訳注を見られたい）。

「高野山にて金剛三昧長老の和歌山に之くを送る」○四四は、高野山の高僧が、和歌山の玉津島の寺に赴任するのを見送ったもの。寂庵は、「師去るは城南の玉津島、三十一字波瀾を起す（老師が行かれるのは和歌山城南の玉津島、衣通姫の歌三十一字でも有名な人の心を波立てる所、老師よ、どうか俗念に牽かれなさいませんに）」、「女色に惑わされるなど、長老を楽しくからかっている。

この他にも（○二六・○四三・○六一・○八六・○九五・○九七・一〇一）等、いたるところで、寂庵の機智と遊び心に接して、楽しくなってしまう。

岡山の地名や名所・岡山の名士が随所に出てくるのも、この地の人間にとってはうれしい。連島の矢柄（○六五・西浦（○六七）はもとより、岡山城（○四一・○六九）・児島（○四一）・福山（総社市、○五七）玉島（○六六）・走出（笠岡市、○八三）・高梁（○五九・○九六）・福地（高梁市、○九六）等々、当時の現地に立つ思いがする。

井上蘭台（○三四・○三九）・水谷勝隆（○六六）・井上四明（附録）等は、みな「岡山県歴史人物事典」に登場する名士である。

語釈については、なるだけ先例を挙げるように努めた。これを通して、我々は寂庵の漢学への素養を窺うことができる。当然だが、「論語」を熟読して、「論語」の故事と語

とが随所に活用されている。「詩経」は朱子の「詩集伝」に拠って理解している。唐宋の詩は無論だが、元明の詩をもよく読んでい。一般によく読まれていたものだが、「蒙求」が愛読書で、その故事が処々に読みこまれている（○一三・○二七）等々。

陶淵明を愛し、杜甫に親しんでいた他は、特に古人の別集を愛読していた形跡はない。仏教（密教）関係の語については、私を含めて一般読者には馴染みのないものが多く、しかも参考文献の「円福寺寺記」・「讀寂津八祖影」他、後半の詩文には頻繁に登場する。

これは「仏教語解説」を立てて閲読の便を期した。

書跡について。上に述べたように大部分は端正な楷書である。だが、「冬日宿走出淨瑠璃山持寶院……」○八三あたりから、行書風になり、「宝曆十四年……」○八四からは草体となって文字も乱れ始める。これは寂庵最晩年の筆であり、体調が大きく影響しているだろう。

監修というのはおこがましい。この漢詩集を、宝嶋寺住職哲定師・融元副住職を初めとする「宝嶋寺古文書研究会」の方々は、三十数年にわたって營々と読まれ、注解を記録されてきた。私は、それに基づいていささか訳や語釈を整理し、体裁を整えさせていただいただけである。岡山大学に勤務していた縁で、この仕事に参加させていただくことができた。

作業に当たっては、学問的な正確さを保つとともに、寂庵和上への敬慕の念が隔々にま

ように心がけた。
この詩集に関わらせていただくことで、大いに勉強させていただき、常に多くの発見があり、かつてない喜びを味わうことができた。読者もきっとこの詩集を楽しく読んでくださるものと思う。寂庵和上に合掌。哲定老師に深く感謝の念を捧げたい。

下定 雅弘

二〇一七年七月吉日 謹記